

私の本棚

監事 山内 浩



本棚 1（実家）

本を読み出したのは小学校高学年からです。河出書房新社刊、日本文学全集、現代の文学(何れも昭和38年、39年発行)を片っ端から読んでいました。読書に挑戦していたのです。今考えても小学生には難しすぎました。分からないということがよく分かったのです。

本棚 2（中学、高校、大学時代）

昔から本は持ち続けるタイプなので今でも殆ど残っています。中学の頃は日本のメジャーな作家の作品を読んでました。中学3年の冬に三島由紀夫の死を知ったときは衝撃を受けましたね。寒い日であった気がします。

高校、大学に進むにつれて文学全般にのめり込んでいきます。大方の青年がそうであるように人生とは何か煩悶していましたね。高校の時には純文学では福永武彦、詩では中原中也に傾倒していました。当時は詩人になりたいと思っていたのです。

大学時代は、外国文学を中心にあらゆるジャンルの本をアパートにこもって読んでいました。自分なりの本を読むスタイルができたのはこの頃ですね。

本棚 3（社会人になって）

文学から少し距離ができて仕事に必要な本（税務、財務、法務、業界研究等々）が占めるようになりました。若い時には仕事で徹夜も多く、今でも当時を思い出して、日曜日の大河ドラマが始まる時間になると嫌な気分が襲われます。心が疲れた時には宗教とか禅の本を読みました（松野宗純は殆どあります）。

後はサラリーマンがよく読んでいる司馬遼太郎と藤沢周平ですね。前者では「世に棲む日日」、後者では「風の果て」が好きです。司馬遼太郎は世の中を上から見て、藤沢周平は下から見ていられると言われたりしますが私はどちらも好きです。

経営者の書いた本も多くあります。樋口廣太郎、

稲盛和夫等々。今ですとカルビーの社長だった松本晃さん。考え方が明解です。

本棚 4（現在）

最近の読み方は5、6冊同時並行、深夜の1、2時過ぎから朝方まで1日2時間は読みます。相変わらず気の向くままですが、特に老いに関する本が多くなりました。勢古浩爾なんか好きです。人は誰でも齢をとる。従容として受け入れなさいということですね。

本棚 5（大学図書館）

私の本棚ではありませんが時間を見つけてよく行きます（仕事に必要な本も結構あるのです）。1階はレイアウトを変更し新しく入庫した本が目につくように工夫されています。膨大な数の書籍類が収蔵されていて正に財産ですね。2階雑誌コーナーでは書評を一通り見て買うかどうか参考にしています。

本棚 6（これから）

この先本棚の中身がどの様になっていくのか分かりませんが、人は何故本を読むのでしょうか。

一般的に人間が成長（いい意味で）していくためには1.ものすごい人に出会うか2.強烈な体験をするか（職を失う、収監される、大病を患う等々）3.すばらしい本に巡り合うかの3つだとされています。

運命の遭遇も、人が多く経験しないことも願って出来ることはありません。一番の捷徑は本を読むことです。今自分が悩んでいることは先人もきっと悩んだことで、必ず誰かが何処かに書いているはずです。

「ひととは生きて来たようにしか死なない」

木に古いと書いて「かれる」と読みます。人は古くなって「善く生きた」と言われたいものです。

（やまうち ひろし）